

てくアく 171号

— キリストと歩こう —

発行：京都教区カトリック正義と平和協議会
京都市中京区河原町三条上る
TEL075-223-3340
FAX075-223-3371
E-mail:seiheiky@kyoto.catholic.jp

台湾と沖縄 帝国の狭間からの問い

日時:2025年5月31日(土)14:00~17:00

場所:河原町カトリック会館 地下2階 大ホール

講師:駒込武さん(京都大学大学院教育学研究科教授)

司会:ご講演をいただきます前に、まず、私たち京都教区正義と平和協議会の担当司祭であります、奥村神父の方より挨拶をいたしたいと思います。よろしくお願いします。

奥村神父:皆さん、こんにちは。本日はご参加いただきましてありがとうございます。毎年学習会を行っておりますが私たちの関心というのは、この会の正義と平和協議会という名前にあります通り平和を求めるテーマがあります、そこに正義といったものもあります。聖書の詩編の中に「正義と平和は抱き合う」という言葉がありますが、正義と平和はなかなか抱き合うのが難しいので、あの言葉が残っていると思うんです。どのようにこの正義と平和を実現していくかということについて、神様の力を私たちのこの働きへと変えられていく機会がないかということで、日々活動をしているのがこの会だと思うんです。ご存知ない方もいらっしゃると思いますので、簡単に正義と平和協議会について、入り口にパンフレットがありますので、後でごゆっくりお読みくださったらいいと思います。

第二バチカン公会議が1965年に終了しました、60年前です。公会議は「人類の大部分が今もなお苦しんでいる多くの艱難を考え、また貧しい人々に対する正義とキリストの愛を至るところで奨励するために、普遍教会のある何らかの機関を設立することが非常に時宜を得たことである」と考えて、この『現代世界憲章』という1965年に出了された言葉が元となりまして、世界のあらゆる国々、カトリックの教会がある国々に呼びかけられたんです。それが発端となりまして、京都では1977年にこの協議会が成立しています。結構な時間が経っているのですけれども、現在に至っています。基本的にはこのような学習会や研修会といったものの啓発活動、こういった会議の啓発活動が主なものなんですけれども、できる限り多くの方々に参加していただいて、この正義と平和実現に向けての働きとなることを願って活動しております。

もう一つ、入り口にこういう冊子が置かれているんですけども、この水色『すべての命を守る教会をめざして—ハンセン病問題過ちを繰り返さないために』という冊子です。カトリック中央協議会の中にあります社会司教委員会というところが発行しました。日本のカトリック教会は歴史の中で、このハンセン病者に対する、様々な奉仕をしてまいりましたけれども、それが結果としては日本という国の強制隔離政策に加担したという視点でこの冊子書かれてあります。教会の責任を問うている書物ですね。すったもんだがあつて5年ぐらいかかってやっと出たんですけれども、ぜひ手にとってお読みくださって、教会の本当の福音に根ざした活動というのは望まれるんですけれども、何かのこの思い違いや勘違いと言ってしまうといいんでしょうか、そういったものによって、逆に福音

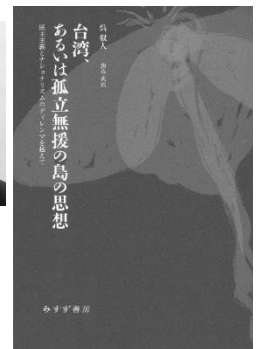
が損なわれていくといったこともあり得るそういう危機を感じさせるような書物になっておりますのでぜひお読みくださったらありがたいと思いますし、皆さんで分かち合ってくださいと、非常にいいかなというふうに思っております。これは余談でありました。今日は駒込先生、よろしく願いいたします。「台湾と沖縄 帝国の狭間からの問い」というテーマで、これも入り口に本がありますので、ぜひお買い求めいただいて今日のこの研修プラスで深めていただいたらというふうに思っております。では、駒込先生、よろしく願いいたします。

駒込さん: 皆さん、こんにちは。今日はせつかくの土曜日の午後にお集まりいただきありがとうございます。駒込です。よろしく願いします。座ってお話をさせていただきます。今日は「台湾と沖縄



帝国の狭間からの問い」というテーマでお話をさせていただきます。最初に簡単に自己紹介ですが『世界史の中の台湾植民地支配』(岩波書店)という本が、今から 10 年ほど前に私が出版したものです。たった 15,000 円の本でございます。消費税を入ると 16,500 円になってしまいますので、もし機会があれば図書館などで見てほしいと思いますが、日本の台湾植民地支配を帝国の狭間、そうしたものと関係の中で考えた本です。『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』(みすず書房)という本は私にとって、同じ年代の友人である呉叡人さんという台湾の政治学者の本を翻訳したものです。4 年ほど前に刊行しました。私は日本の台湾植民地支配の歴史を研究してきたのですが、

実は戦後台湾の人々がどんな経験をして、今どんな状況に置かれているかということは、恥ずかしながらあんまり知りませんでした。この呉叡人さんという方の日本植民地時代の台湾の歴史について書いた博士論文、英語で書かれたものですが、それを読んでいろいろ呉叡人さんと議論をし始める中で、呉叡人さんの歴史の見方というのは戦後の台湾の人々の経験と、今台湾の置かれた地位というものがいろいろ関係している。そういうところで呉叡人さんの考えをもっと知りたいと思いながら彼の書いたものを訳してまとめたものがこの本でございます。



呉叡人著/駒込武訳

『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』(みすず書房、2021 年)

■はじめに「台湾は中国の一部」なのか？



今日のお話は、台湾と沖縄ということなんですが、これだけはちょっと心に残って帰ってほしいという問いは「台湾は中国の一部なのか？」ということなんです。今、台湾のことはいろいろな意味で注目を集めている、戦場になるかもしれないということで注目を集めています、本当に台湾のことを知ろうとか、知りたいっていうよりはあんまり近寄ってこないで、みたいな関係で台湾のことを遠ざけておこう、あまりかかわりたくない、そういう印象を持っている人が少なくないように感じます。

そうした態度の前提には、台湾は中国の一部、だから関係ないじゃないっていう、そういう判断というものも見え隠れするように思います。本当にそうなのか、難しい問題です。今日これから話す通り、一部であると言えるような言えないような難しい問題ですけども、少なくともそんな単純に割り切れる問題ではないということです。なぜそう簡単に言い切れないかというと、日本という国とのかかわりというのが決定的に大きな位置を占めている。そういう点で言えば全然人ごとではないということ。そういう意味で、この台湾は中国の一部なのかという問いをめぐってのお話になります。ただ台

湾が中国の一部かどうかというのは、今日の話の後の方でも出てきますが、一つには国際政治の問題で、こういうことにおきましようみたいな取り決め、そういう問題があります。ですが、ここで考えてみたいのは、より根本的に歴史的に見て本当にそう言えるのかということです。今日は私自身の専攻する歴史の話をさせていただきます。

■Ⅰ.台湾「割譲」(1895年)

3つの時期に分けてお話しします。まず、いわゆる日清戦争の結果の台湾「割譲」、1895年のことです。これから約50年間にわたる日本の植民地支配というものが続きます。

■Ⅱ.中華民国への「返還」(1945年)

2つ目の時期は1945年です。この辺になるとちょっと記憶があやふやという方もおられるかもしれませんが、台湾が日本の植民地だったということは知っている。じゃあ、日本が戦争に負けた後どうなったのか。中華民国という国に「返還」されたということになっています。そして今も台湾の正式な国名は中華民国です。この中華民国という言い方に実はいろいろ難しい問題があります。台湾で生まれ育った人々の感覚とはだいぶずれていること、そうしたものが様々にございます。

■Ⅲ.米中・日中共同声明(1972年)

3つ目は同じ中華民国の時代。日本で言う戦後の時代です。米中・日中共同声明というのが1972年にありました。日本では一般に1972年日中国交正常化ということで大陸の中国の人と仲良くなって、中国の物産がたくさん入ってきて、パンダとかも動物園にやってきて良かった、めでたしめでたしみたいな印象が強いと思うんですが、台湾の人にとってこの1972年というのは果たしてどういう意味を持ったんだろうか。そうしたことを中心に考えてみたい。

そしてまたこの3つ目の時期の70年代以降の話の中で台湾人とカトリック教会とのかかわりについてもお話をさせていただきたいと思います。私自身、ほとんどクリスマスとイースターにしか行けてないんですがカトリック高野教会に属しております。そうした中で、昔、正平協の大会などにもちょっと立ち寄らせていただいたことがあります。先ほどの神父様のお話にもありましたが、この集まりが「正義」という言葉を掲げているということがとても大事なことでないかと感じています。「平和」を大切にしようという声は日本社会でいろいろ聞かれています。神父様も言われたように、じゃあ「正義と平和」というのは、いつも両立するかっていうと微妙っていうところも必ずある訳です。極端な話ですが、ある特定の地域のある特定の人々が、大きな国によって自分たちの自由を奪われ、発言を奪われ、自分たちの尊厳を否定され続けているとします。仮にその時、大国の人から見ればそれは「平和」です。その小さな地域の人々が黙っていてくれればもっと「平和」です。でもそれは「正義」なのか？という問題があると思うんです。今日のこれからのお話は単純な答えはない、何が「正義」なのか、そしてその「正義」と「平和」との両立っていうのはどういう形であり得るのか。簡単ではない問題があるのだということをまず知っていただきたいと思います。その問題を考えていただくための糸口が台湾は中国の一部と言い切ってしまうとよいのかということです。

■無意識の「大国主義」を克服する課題

今日のお話のまとめになることを最初にお話ししておきたいのは、無意識の大国主義を克服する課題ということです。おそらく今の日本で「日本って大国ですよ」と言ったら、そうですかで、別にそう思わないっていう人が多いと思います。でも例えばこんな話があります。いろんな人が台湾の話をしているときに、ある左翼系の政党の方が「台湾の問題は、日本はアメリカと中国で平和的に解決すべきだ」と言ったんですね。私は「えっ？」と思いました。えっと思ったのがなぜかわかりでしょうか。台湾の人々の運命を決めるのに、台湾の人々ではなく日本の意向、アメリカの意向、あるいは中国の意向というのが優先できるのでしょうか。もしそれを優先できると考えるとしたらそれは一種の大国主義だと思います。台湾をどうするかは私たちが決めるということをほとんど無意

識のうちに前提として、自分を大国の側に置いていることにはならないだろうか。そういう問題を考えたいと思います。

■「台湾は中国の一部」なのか？「沖縄は日本の一部」なのか？「ウクライナはロシアの一部」なのか？それをだれが決めるのか？

今日の問いの焦点は「台湾は中国の一部」なのかということです。その問題をより根本的に言うと正義と平和との兼ね合いという問題にもなります。この問題を考えるにあたって歴史の問題、台湾は中国の一部なのか、これを今の外交上のあるいは国際上の取り決めという次元ではなく歴史的にそう言えるのかという次元で問いを立ててみたいと思います。

おそらく多くの方は「台湾は中国の一部。そうでしょう」と答えると思います。では「沖縄は日本の一部」なのでしょうか？これも多くの人はそうでしょうと言うかもしれません。ですがちょっと考えてみてください。いつの歴史を捉えているのか、そして誰がそれを判断するのかによっても違ってくるのですが、この問題はかならずしもそんな単純な問いではありません。

琉球王国という独自の王国、日本の室町幕府に外交使節を送っていた王国が 14 世紀に成立しました。そして 17 世紀はじめの島津薩摩藩の琉球入りという時期まで、琉球王国は完全な独立国でした。その後、薩摩藩島津氏が実質的に琉球王国を支配し、外交権などを制限します。でもいわば間接統治と言うのでしょうか、琉球王国は残っていました。その琉球王国が完全に亡くなったのはいつですか？1879 年、いわゆる琉球処分です。今、沖縄の歴史家は、この琉球処分の時に、琉球王国の役人がたくさん獄中にとらわれて拷問されたこと、つまり琉球王国の併合という事態が、多くの人にとって不本意だったことを明らかにしています。

その後、沖縄は、例えば地上戦の舞台として本土決戦を長引かせる時間稼ぎの役割を担われる、戦後アメリカの施政権下に置かれる。そうした形で、独自の歴史を歩んできた訳です。1972 年に「沖縄復帰」と言いますが、今沖縄の中で「復帰」して本当に良かったんだろうかと考えると微妙だという声が少なからず聞かれます。例えばそういうことを考えたときに、沖縄は日本の一部だということについて絶対的な答えがある訳ではない。誰がどのように歴史を解釈し、受け止めるのかによって変わってくる訳ですね。

「ウクライナはロシアの一部」ということをロシアのプーチン大統領が主張して、ウクライナ侵攻を正当化しました。これも本当にそうなんでしょうか、微妙です。私の友だちでウクライナの歴史をしている京大の教員がいますが、あのあたりの地図を見ると、国境線なんか、何度も何度も変わるんですね。日本だとしても島国で海があるので、なんとなく国境線っていうのは決まっているようですが、ウクライナはロシアの一部だったり一部じゃなかったり、地上の国境線はいろいろ変わる訳です。「ウクライナはロシアの一部」という言い方についても、少なくとも簡単な答えがある訳ではないということです。

そもそも日本人とか沖縄人とか台湾人とか、そういう国民意識みたいなものができるのは、日本で言えば明治維新以降、世界的に言えば近代という時代においてのことです。江戸時代において、例えば「お国は？」と聞かれて、「日本」と答える人はごく一部の公家か侍です。普通の人は「お国は？」と言われたら、土佐の国とか信濃の国と答えます。それが「国」の意味なんです。それでは国境線はというと、これも曖昧だった訳です。台湾が清朝の領土で一部であったのは確かだとして、そして琉球王国の沖縄本島が実質的に日本に支配されていたことも確かだとして、それでは琉球王国の沖縄本島のもうちょっと先にあった宮古島や石垣島は「日本」だったんでしょうか。「中国」だったんでしょうか。近代になるまでは曖昧だったんです。だから近代になって揉め事が起こる訳です。

ほとんどあらゆる国境が厳密な「線」ではなく「面」だった、あのあたりだったんです。それで成り立っていたのが前近代の世界ですね。そういう点で言うと、全体として境界が実は曖昧だった訳ですね。そういう点で、「台湾は中国の一部」と言い切れるのかは微妙だということになります。

さて、これまでは長い前置き、ここからが本題です。私の専門は台湾の歴史です。多くの日本の方は台湾の歴史ってよく知らないっていう人が多いと思うんです。旅行の行き先としては知っているし、小籠包も知っているし、タピオカミルクティーも知っているかもしれないけど、台湾の歴史ってと言われるとよく知らないっていう人が多いと思います。ですので今日はそういう点でも沖縄と台湾というのをつなげて考えてみたい。沖縄のことはまがりなりにもイメージがあると思うからです。

今、台湾と沖縄の置かれた境遇っていうのは、ある意味で非常に対照的です。が、沖縄の人にとっては米軍と日本政府というものが脅威であり、台湾の人にとっては中華人民共和国が脅威である。どっちが正しいの？日本はアメリカと中国とどっちにつけばいい？みたいになりがちですけど、おそらくその問いの立て方は間違っている。間違っているという言葉が大げさだとしたら、本質的な問いではない問いになってしまっている。むしろ本質的な対立軸は中国、日本、アメリカのような大国と、台湾や沖縄のような島々との間にあるのではないか。そういう点で、むしろ台湾と沖縄の共通の運命というようなものに着目したお話をしたいと思います。

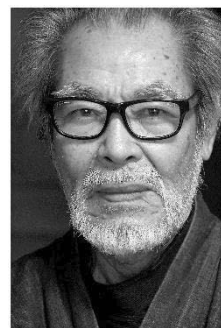
■台湾と沖縄～海続きの世界

あらためて地理的な関係を確認すると、石垣島から台湾の港町である基隆あるいは台北までせいぜい 200 キロなんですね。今から 20 年ぐらい前、石垣島から基隆まで船で行ったことがあります。フェリーみたいなので、朝 10 時頃に出て、夕方 6 時ぐらいに着きました。天気が良くて、もっと船に乗っていたかったですけど、もう着いちゃったの？という感じですね。すごく不思議なのは、石垣島と東京は 2000 キロ離れているでも、石垣島では東京の言葉が話されている訳です。台湾では 2000 キロ以上離れた北京の言葉が話されている訳です。当たり前のように思うけれど、船で行き来すると、物理的な 2000 キロという距離と全然違う力学がそこに働いていることを感覚的に感じる訳です。

私は台湾史を専攻する者、学ぶ者として、台湾の歴史を研究しているんですが、やはり日本社会で台湾の歴史を語っていくときに、沖縄を介して台湾に結びつくことが大切であり、沖縄を飛び越えて台湾につながる、一足飛びの結びつき方には問題がある、沖縄を介して台湾と結びついていくことが必要なのではないかと考えています。

■台湾と沖縄～「大陸ご都合主義」を超える

私にとって、台湾と沖縄をつなげる考え方が大事だということを教えてくれた方として、川満信一さんという方がおられます。沖縄の詩人であり、思想家でジャーナリストであった方です。残念ながら昨年(2024 年)、亡くなられました。『台湾と沖縄 帝国の狭間からの問い』という本を編集するにあたって、川満さんに文章を書いていただきたいと思ったんですが、ちょっと体調が悪くて無理だと言われました。できたら贈ろうと思っていた矢先に、亡くなられてしまって本当に残念な思いをしました。この川満さんの話されていることが今日の話の手がかりです。アメリカと日本政府との関係では、あたかも台湾と沖縄が対立しているように見えます。



川満信一さん(『沖縄タイムス』2020 年 9 月 11 日)

沖縄には反米軍という思いがすごくある。台湾には中国との脅威の中で、むしろ米軍に助けてほしいという思いがある。その点では対立しているように見える。でもそれは本質的な対立ではないんじゃないか。川満さんは 2013 年の対談でこういうふうに言われています。「アメリカや中国は大陸ご都合主義だ。それに日本も韓国も大国ご都合主義。そのなかで、韓国で沖縄と同じようにしたたかな経験を負わされてきたのは済州島だ。それから中国方面では台湾、海南島もそう。こうした大陸と大国主義にはさまれた島々の連帯をいかに固めるか。そこからそれぞれの大陸・大国に向かって、ここは非武装地帯だと主張できる合意の体制をつくれるか。そしてここはアジアの非武装地帯だから、ここにアジア国連本部を持ってこい」。

皆さんの中には「そんなこと言っても無理だよねえ」と思われる方もおられるかもしれません。ですが、アメリカに付くか、中国に付くかっていうような二者択一でなく、できればこうなったらいいんではないかなという夢というか、ビジョンというか、そういうものをまず持つことが大事なのではないかと思います。ここで書いてあるのは台湾と沖縄の結びつき、そして沖縄は米軍と自衛隊で武装するのではなく、台湾はその武装した米軍に頼むのではない未来を考える、沖縄にも基地はいらないし、台湾にも基地はいらない、ここは非武装地帯なんだからどちらも攻め込まないでくれ。そういう合意を作れないかという提案です。この提案が今日のお話の結論ともいえます。このビジョンをもっと固められないでしょうかということが言いたいことです。でも同時に、決して簡単なことではないことも確かです。

私はこの本ができたときに、那覇のジュンク堂に行って、ブックトークでこの本のできる過程などお話しさせていただきました。たくさんの方が集まってくれましたが、事前に連絡したけど「行かないよ」と言ってこられた方もおられました。やっぱり沖縄における米軍基地反対運動の中心になっている方で、電話で長話したんですけど、「お前の言うことはわからないことはないけど、とにかく沖縄は台湾にかかわる戦争に巻き込まれたくないんだ。事態は緊急なんだ。歴史うんぬんなんてことを言ってる場合ではない」というのがその人の答えでした。

今年(2025年)3月には、この本の序文に私が書いた文章を台湾に行って、下手な中国語で報告してきました。全く同じような反応が返ってきました。「お前の理想的な話を聞くと、自分が汚れた人間のように思えるよ。僕たちは中国が攻めてきたらどうしたらいい？ そればかり考えている」。時間的な余裕を考えたら、そんなことを考える余裕はないという意見が強くありました。ただ、沖縄の方の中にも台湾の方の中にもやっぱりそうだね。出口はそっちにしかないのではないかと云ってくださる人もいました。沖縄の方も台湾の方も迷われていることである、だから京都にいる私たちも迷って当然なんですけど、そういうものとして、この問いを提示していきたいと思います。

とっても難しいように思えるけど、私には台湾と沖縄が結びつく必然性があると思っています。接点となるのは歴史です。歴史について、簡単に台湾の話を中心に、沖縄の話も織り交ぜながらお話しさせていただきたいと思います。

1. 台湾「割譲」(1895年)

日本の歴史の教科書には、台湾のことって本当に書いてありません。1895年、下関講和条約で台湾を「割譲」することになった。それから戦後、蒋介石の率いる中華民国に返還されることになった。もうほとんどそれだけです。「割譲」という言葉はあたかもモノを譲ってあげるというニュアンスですが、台湾はモノではありません。そこに住んでいる人たちがいる訳です。しかも、そこに住んでいる人たちは、この台湾「割譲」という決定にかかわっていませんでした。勝手に自分たちの知らないところで決められたことでした。その台湾に住んでいた人々はどうしたのでしょうか。そのあたりのことからして、日本の教科書にはすっぱり抜け落ちている訳です。



4月17日に下関講和条約で台湾「割譲」、すなわち清朝が台湾を日本にあげるよと言って、台湾の人たちはびっくりします。なんとかそれを避けられないだろうかということで、5月23日には台湾民主国が独立宣言をします。この虎の旗は台湾民主国の国旗です。私たちは清朝から独立した、独自の国だ。だから清朝があげると言っても関係

台湾民主国国旗『黄虎旗的故事—台湾民主国文物図録』(2002年)

ないんだというのが台湾民主国ですね。もちろん、そんなに国としての実態があった訳ではありません。もしも当時台湾に住んでいた人にインタビューができたとして、「台湾民主国」って知っていますか？と聞いたら、「知らない」という人がほとんどだったと思います。ごく一部の政治エリートの間だけです。ただやはりそうした形で抵抗しようという人たちがいた訳です。

5月29日、日本軍が台湾に上陸しました。この日に李鴻章という下関講和条約の清朝の全権代表になった人が伊藤博文首相あてに電文を送ります。「台湾の人民はすでに独立を宣言したるに付き、清国政府は該人民に対してはもはや管轄権を許せざる」(桧山幸夫『日清戦争の研究』下巻、ゆまに書房、2023年、533頁)と書いています。清朝としては台湾を日本にあげるって約束したけれども、台湾は私たちの手元から離れて「独立」しちゃった、だからもう私たちはどうしようもないんだということです。この発言には二重の意味があります。一つは、台湾民主国の試みの中には、清朝の役人も参加していました。日本にあげると言っただけ、欧米列強が干渉することで返してもらえないかなという清朝の思惑もありました。それからもう一つの意味は、あとは台湾に住んでいる人たちがなんとかしてください。あげるって言っちゃったので台湾の人は怒っているけど、清朝はもう関係ないからと、あとは野となれ山となれ式に見捨てる意味もありました。

清国の「棄地遺民」

その後になくなるかということ「台湾民主国」なるものが独立を宣言しますと言った後に、台湾で大変な戦争が起きます。半年間にわたって続く、この戦争を学界では日本と台湾との戦争という意味で「日台戦争」といったりします。台湾では「乙未戦役(いつびせんえき)」と称されてきましたが、近年では「郷土防衛戦争」という性格が強調されています。日本軍は台湾島の北東の基隆という港町近くに上陸して南下して、当時台湾省の中心であった台南(当時の呼称は台湾府)を占領する。あまりに占領に手間取ったためにその途中で、援軍が台南の北方の海から上陸するというもありました。

当時の台湾に住んでいた住民の出自は多様でした。台湾の人というすぐに中国系の人でしょう、漢人でしょうって思い浮かべがちなんですよ。ですが、**台湾はもともと先住少数民族の土地でした。**「乙未之役地図」『台湾歴史地図増訂版』(台湾歴史博物館、2018年)



今日の台湾では誇りを込めて「原住民族(yuánzhù mínzú)」という言葉を使っていますが、日本語では原住民族という言葉はネガティブな意味合いがあるので、ここで先住少数民族という言葉を使うことにします。17世紀、日本で言えば、江戸時代になるまで、台湾には基本的に先住少数民族しか住んでいませんでした。大陸から渡来した漢人はごくわずかでした。17世紀以降、ちょうど日本に江戸幕府が成立して、琉球王国が薩摩藩に支配されるのと同じ時期、大陸から漢人がどんどん移住し始めます。この大陸から移住する漢人の中にも、出身地によっていろんなグループがありました。

漢人の一つのグループは「福佬系」、「ほうろう系」と読みます。福建省南部出身の人たちです。「客家系」(はっか系)は、中国の広東省出身の人です。「平埔系」(へいぽ系)というのは台湾先住民の中で、漢人の生活様式をとりいれた人たちです。台湾の西側はだいたい平地で中央部が高い山脈になっている訳ですが、漢人が西海岸にどんどん移住するに従って、先住民がどんどん山の方に追いやられ、さらに東海岸へと追いやられていくんです。そうなってからも西海岸に住み続けた先住民は、時には姻戚関係を結びながら、様々な形で漢人の生活様式を取り入れていきます。そうした人々を「平埔族」と言います。

日本軍が台湾を占領する以前の台湾は、先ほどお話した先住少数民族と漢人の対立があり、漢人の中でも福佬系と客家系の対立があり、実は福佬系の中でも福建省の泉州出身者と彰化出身者で対立し、さらにそこに平埔族が対立するという社会でした。豊臣秀吉の時代の日本のように「刀狩り」が行われた訳ではないので、お互いに武器を持って武装して戦っていた。それが台湾の社会でした。そういう点で言えば、アメリカの西部劇の世界に似ていると言ってもよいかもしれません。西部劇でガンマンが出てくるのは、当時のアメリカ西部は開拓地であり、行政の威令が及

んでいない地域であるためです。「おまわりさん、あの人がひどいことしたからとっちめてやったって」と言っても全然機能しないから、しょうがなく自分たちで武装する訳ですね。19 世紀半ばまでの台湾は、そういう社会だったと言ってよいと思います。

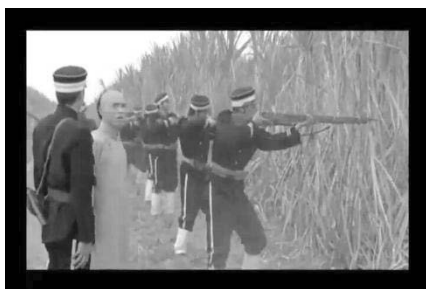
相互に武装して対立していた人々が「私たち台湾人」として協力するようになったきっかけが、実は日本による台湾占領なんです。先ほどちょっとだけウクライナの話をしましたけど、ロシア史・ウクライナ史の専門家の話を聞いて、やっぱりそれはそうなんだと思ったのは、「ウクライナ人」という意識はソビエト連邦の時代もあったけれど、実はウクライナ人の中でもすごく対立があった。「ウクライナ人」という意識が本当に成立したのは 3 年前にロシアが侵攻してからだという言い方をしていました。台湾にもそうしたところがあります。

さて、日台戦争のことを話しますが、日本軍が北部から進駐し始める、清国の軍人の多くは大陸に逃げ戻りました。もともと台湾に移民して台湾に生活の基盤を築いていた人は、そんな簡単に自分たちの開墾した土地、家を捨てられない訳です。そうした人々が自分たちで義勇軍を作って日本軍と戦います。当時の日本のジャーナリストの伝える言葉では、「**人民の多数は、敵抗の精神に富みしこと、婦女も亦戦争に与かれて我に抗せり**」と書いています(川崎三郎『日清戦史』第7巻、博文館、1897年)。女、子どもも日本軍を撃退するための防衛戦争に参加している。それはほっとけば女性も子どもも皆殺しされるからです。

台北から台南に行くまで日本軍もかなりの死者を出しますが、ところどころ激戦地で大量の台湾側戦死者が出ています。台湾中部の彰化という街近くの八卦山という山は激戦地でした。戦後になって何百体もの人骨が発見されて、この八卦山の戦いの戦死者であるとわかってそれを祀る慰霊碑が作られました。私は今年(2025年)3月に台南の北部の佳里という町を訪れましたが、ここでも日本軍による大量の住民虐殺事件が起きています。住民をどんどん特定の場所に追い詰めて、女、子どもを含めてみんな火をつけて焼き討ちにする。そうした虐殺事件の記念碑が佳里という街にも立っています。日本が台湾を占領する過程で、そういう虐殺事件があちこちで起きていたということも日本ではあまり知られてない訳ですね。結局、日本軍の方が武力に勝りますから、日本軍が台湾全島を占領します。その過程で台湾の住民には、私たちには清国に棄てられた土地なんだ、棄てられた土地に遺された民なんだという意識が深く刻まれます。清国からすると、もともと台湾は新しい開拓地、割譲することのできる場所だった訳です。「台湾は中国の一部か?」ということを考えるときに、この 1895 年の出来事は重要な要素です。

台湾映画「一八九五年」(2008 年、洪智育監督)

いまお話しした日台戦争のことを描いた映画として、「一八九五年」という映画があります。台湾



で作られた映画です。日本語字幕がついてないんですけども、日本でもユーチューブで見ることができます。1895 年の戦争を描いたものですが、日本軍がおそろいの軍服を着て洋式の銃を構えているのに対して現地住民は客家という広東省系の呉湯興をリーダーとして、もともと対立していた福佬系の人々や、サイシャットという先住民と協力しながら、日本軍に対してゲリラ戦を展開した様子が描かれています。

台湾映画『一八九五年』(2008 年、洪智育監督)
呉湯興を領袖とする客家の義勇軍が、福佬人や、サイシャット(先住民族)の援軍をえて展開したゲリラ戦を描写

日本軍と義勇軍の戦争は非対称的です。正規軍と正規軍の戦争ではないんです。義勇軍は民軍ともいいましたが、民衆がやむを得ず戦った軍隊である。こうし



た非対称的な戦争のことを、「植民地戦争」というふうに言います。例えば、イスラエルがガザで凄惨な虐殺をしていることを、皆さんご存知だと思います。私から見ればあれも植民地戦争です。ガザでイスラエルがひどいことをしているのではないかと声を上げる人も、いや実はかつて日本はイスラエルのようなことをしていたんではないか、そういう意識は弱いことでしょう。日台戦争を考えるときに、圧倒的に非対称的な関係の中での戦争というものをイメージしてもらう必要があります。

伊波普猷「中学時代の思い出」(1926 年)

1895 年は実は沖縄も激動の年でした。というのは、琉球王国が実質的に島津藩の支配下にありながらも、清国と冊封関係を結んでいたために清国への帰属意識の強い人々がおり、1879 年の琉球処分により琉球王国が滅亡させられたのち、清国の力を借りて琉球王国を復活させようとしていました。ですので、日清戦争の時に沖縄では清国に勝ってほしいという人も少なからずいた訳です。そうした人たちは戦争中、清国に逃れていたんですね。他方、のちに沖縄学の祖とされる伊波普猷という人物は当時沖縄県立の中学校の生徒でしたが、清国の軍隊が沖縄に上陸したときに交戦し、清国につながる沖縄の人を殺すために実弾射撃訓練をしていたという回想を語っています。日清戦争のさなかに清国に勝ってほしいと思っていた人たちは、日清戦争後にみんな牢屋に入れられたと語っています。ですから、1895 年というのは台湾の人々にとって絶望の年であると同時に、沖縄の人々にとっても絶望というのでしょうか、大和、日本に希望をつないでいた人もいた訳ですが、清朝に希望をつなぎ、沖縄の尚家という王室を戻したいと思う人にとってはもう無理だと断念する、絶望の年でもあったということです。



伊波普猷

■沖縄における「植民地」的教育

先ほど登場した伊波普猷は日清戦争が終わった後、沖縄県尋常中学校を退学処分になれます。なぜかという、当時沖縄県立尋常中学校の校長先生であった児玉喜八が、この学校では英語は教えなくてもよいことにする、随意科目化するとして、このように話しました。「あなたがたは、普通語(日本語のこと)もろくにしゃべれない。日本語も完全にしゃべれないのに、英語まで勉強させるとはあなたがたは可哀そうなんだ。だからもう英語は勉強しなくてもいい」。この言葉を聞いて沖縄の学生たちは怒った訳です。明治末当時は、今以上に英語ができないと、社会の高い地位に就くことはできない時代でした。大学の授業の多くも英語やフランス語やドイツ語で行われていた時代でした。ですから、英語を勉強しなくていいというのは、自分たちを「植民地扱い」するものだということで、伊波普猷らは怒ってストライキをして退学処分にされた訳です。

■台湾における「植民地」的教育

沖縄で英語を随意科目化しましょうといった校長児玉喜八は、沖縄を異動となったのちに台湾総督府の学務部長という形で台湾の植民地教育行政を指揮するようになります。台湾でそもそも中学校を設置しようとしませんでした。中学校を設置すると英語を勉強させろとか、権利と義務の関係とか、植民者からみて余計なことを言う人間ができてしまうからでした。台湾で現地住民のための公立中学校ができたのは実に 20 年後。台湾人が必要なお金をすべて寄付するから作ってくれと頼み込んで、ようやくできた状況でした。こうした点でも台湾と沖縄はつながっているところがある訳です。

こうした状況の中で「台湾人」という意識が徐々に形成されていきます。先ほど日本人がやってくるまでは台湾のなかでさまざまなグループが武装して対立していた、とお話しました。この時期には、「台湾人」という観念はなかった。あるいはそういう言葉があるとしても、重要な意味をもたなかったと考えられます。今日の京都で、「左京区人」と言いませんよね。「左京区人」だと言わないのは、左京区という単位がそんな重要な意味を持っている訳ではないからです。「台湾人」という

言葉も、当初は台湾に住む人々以上ではなかった訳ですが、日本人から徹底的に差別される経験を通じて、1920 年前後になって私たちは「台湾人」なんだという語りがなされるようになります。

差別の例として、さきほど教育をめぐる問題についてお話ししました。さらにより根本的な問題として、当時台湾の住民には一切、参政権がありませんでした。立候補する権利がないのはもちろん、帝国議会その議員を選挙する権利もありませんでした。だったら、せめて台湾に議会を作って、台湾の法律は私たちも参加する台湾議会で決めるようにしてほしい、つまり自治を認めてほしいという運動が始まります。

台湾総督府は台湾議会の設置せよと要求する運動のリーダーを牢屋にぶち込みます。ようやく刑期を終えて牢屋から出てきたばかりの人を出迎える写真が残されています。帽子をかぶっている



る人は牢屋に迎えに来た人たち、帽子をかぶっていないのは牢屋から出てきた人たちです。例えばこの写真が象徴しているのは「私たちは台湾人」であるという意識です。こうした人々が中心となって『台湾民報』という新聞を 1920 年代に創刊しました。その社説では、「政治上からいえば、我々台湾民族ははとしく被抑圧者であり、経済上ではひとしく搾取されている

階級なのである」と書いています（『台湾民報』第 192 号社説、1928 年1月）。ここで「台湾民族」という言葉が使われている点が着目されます。民族を優先するのか、階級を優先するのか、そういう議論が昔も今もしばしばなされます。私たちは政治的な非抑圧者として「台湾民族」であると同時に「被抑圧階級」である、したがって民族的立場と階級的立場は矛盾しないという考え方を持っていた訳です。

今日、台湾の人にあなたは台湾人ですか？中国人ですか？という世論調査が台湾でなされる、最近では圧倒的に多くの人が「台湾人です」と答えます。あるいは「台湾人であり、中国人でもある」と答える人もいますが、「中国人である」とだけ答える人はごく少数になっています。こうしたアンケートに接すると、「台湾人」という言葉が、もっぱら中国との関係で考えられているようですが、そうではない。台湾人というのは、日本の植民地支配の中で、日本の植民地支配に抵抗する中で使われるようになった言葉だということです。日本の植民者がこれに対して何をしたかという、徹底的な同化政策です。教師が台湾語を話すんじゃない。話したらぶん殴るぞと生徒をおどす。あるいは神社に参拝させて日本の神様を拝ませる。外面的、形式的なことで一挙手一投足を縛ります。それはとりあえず形式的なこと、日本の神様に祈ってみせることだけど、それを繰り返し繰り返し行動させられる中で抵抗する気力のようなものが削がれていく訳です。

■私立台南長老教中学の神社参拝問題

一つの大きな問題が神社参拝問題です。この神社参拝問題が特に大きな問題となったのは、台湾人の中のキリスト教関係者です。台湾にもカトリック教会はありましたが、プロテスタント、特に長老派が台湾人社会のなかに比較的浸透していました。日本で言えば明治学院などの学校を設立したのが長老派です。長老派キリスト教は、台湾で小学校レベルの学校から中学校レベルの学校、さらに神学校のように専門学校レベルの学校まで経営していました。その中で台南に創立された長老派の中学校がありました。私立台南長老教中学という学校です。ここからは「長中」と略すことにします。私はこの一つの小さな学校の歴史に着目して研究を続けてきましたが、ここにいろんな問題が濃縮されていると感じています。

長中の中心的な教師は林茂生という人物でした。お父さんは有名な儒者だったんですが、キリスト教に改宗していました。林茂生は長中で学んだ後、東京帝大に留学して哲学を学びます。その後、母校である長中に戻って教頭先生になります。先ほどお話したような台湾人としての自治を求める運動が起きると、林茂生もそれに参加します。それに対して台湾総督府はいろいろな嫌がらせをして、今のお金で言えば 10 億円ぐらいの寄付金を集めないと、この学校の卒業生は上級学校に進学できない袋小路の学校にするという破格な条件をつきつけました。するとキリスト教徒でない人も含めて、この学校に 10 億円近くの寄付金が集まりました。そしてこの学校も「台湾人の学校」にしていくのだという語りがされるようになります。ここで「台湾人」という言葉が使われるということに気をつけてください。先ほどお話ししましたように、もともと「台湾人」という意識はなかったんです。ただし、学校ではみんな日本語や日本の歴史を学ぶことを迫られて、台湾人として台湾の歴史を学んだり、台湾の言葉を学ぶことを徹底的に否定されていました。そうした中で、この学校は台湾の言葉も、台湾の歴史も学ぶことのできる例外的な学校でした。そして費用という点でも「台湾人」が支える「台湾人の学校」なんだという宣言を発表した訳です。



総督府にとっては、こういう学校は「同化教育」という方針を逸脱した学校ということになる訳です。1930 年代になると、台湾総督府や台湾軍の軍人が後ろでそそのかして、この学校を潰せという運動が起きます。1934 年の新聞ですが、「教育精神を冒瀆する長老教中学を否認」「台南長老教中学問題 国体の尊厳を冒瀆する非国民を膺懲せよ。台北郷軍決起、中央へ打電」というような見出しが新聞に躍ります。「郷軍」というのは在郷軍人会です。「国体の尊厳を冒瀆する」というのは神社参拝しろと言ったのにしないことを指していました。「台南長老教中學生に日本国民精神殆どなし、恐懼



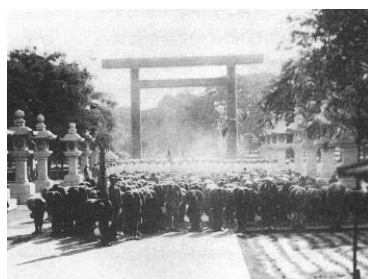
すべく戦慄すべき其内容を俄然・・・輿論更に沸騰」という記事もあります。「輿論沸騰」と伝えているようですが、むしろこの新聞報道がことさらに「沸騰」させるための論調を展開している訳です。新聞が総督府、権力と一体となって、あんな学校潰せという一大キャンペーンをする。

今ご紹介した記事は、本当にごく一部です。膨大な新聞記事が出ました。

キャンペーンの発端は 1934 年 3 月でしたが、5 月になると急に論調が変わります。「台南長老教中学校生の更生の道に躍進。聡明、至純～バンド学長の徹底改革案」。バンド校長というのはイギリス人宣教師です。新聞による主な攻撃の標的は林茂生という台湾人、あれは危険人物だとされていました。もう一人、台湾人の牧師が「天皇崇拜などには反対だ」と言っていたために敵視されています。この 2 人を追い出せというのが要求する側の眼目で、イギリス人宣教師の校長が「わかりました。あの人たちが追い出します」と妥協しました。そればかりでなく、校長も理事長も全部日本人にして、神社参拝ももちろんする。天皇陛下万歳をする、そういう学校にするということにイギリス人の校長が同意したということが、「聡明、至純～バンド学長の徹底改革案」として報道された訳です。

宣教師が総督府の要求に妥協したことでいったん事態は鎮まります。ちなみにこれは 1934 年のことです。この前に、1932 年にはカトリックの上智大学が同じように靖国神社参拝に際して神社参拝をしない生徒がいたと軍部から攻撃されます。この時にカトリック教会も屈服して、神社参拝を約束して、カトリック教会全体としても、日本帝国、朝鮮、台湾の学校を含めて、神社参拝せよという要求に従うべきであるという指示が出されます。そうであるために、それでも参拝をしない学校への攻撃はいよいよ強まっていった訳です。

神社参拝というと、七五三や初詣の、のどかな空気を思い浮かべるかもしれませんが、当時の写真が示しているのは、まさに政治的な服従、従順を誓うための儀式であったということです。参拝して最敬礼しているときに最敬礼しなかったら、もちろんすぐに牢屋に連れて行かれます。日本でこうしたことを知っている人はまだまだ少ないんじゃないでしょうか。朝鮮のキリスト教系学校の神社参拝問題を聞いたことがあるけど、台湾のことは聞いたことがないという人が多いと思います。もともと「台湾人」という意識はなかった訳ですが、日本に差別され、抵抗する中で「台湾人」という意識を持つようになります。これに対抗するようにして、日本人らしくなれとすごく暴力的に同化を迫られた訳です。



■「中華民国への「返還」(1945 年～)

日本時代に「台湾人」として語り始めた人たちは戦後も「台湾人」でいられたのでしょうか。かならずしもそうではありませんでした。

基本的な歴史のおさらいですけれども、1943 年にカイロ宣言でルーズベルトアメリカ大統領、チャーチルイギリス首相、蒋介石中華民国総統が台湾を中華民国に返還しようと定めます。中華民国という国が成立したのは 1912 年です。辛亥革命によって中華民国が成立。台湾が日本に植民地化されたのよりも後にできたのが中華民国です。ですから本当に「返還」と言えるのか微妙なんですけども、日本敗戦後に台湾は大陸で成立した中華民国の一部に組み込まれる。その後、蒋介石は大陸での中国共産党との内戦(国共内戦)に敗れて台湾に移動、大陸は中華人民共和国の領土となり、台湾は中華民国となっている訳です。ですが、台湾の人々がもともと自分たちは中華民国の民と思っていたかという、それは微妙な訳です。

■「棄地遺民」の問う責任

日本が戦争に負けてどうなったのか。1945 年 10 月 25 日、午前中に日本軍の降伏式典が行われて、午後台湾が祖国中華民国に戻ってよかったね、というお祝いが行われます。

このお祝いで「台湾省民」代表として演説したのが、先ほど台南長老教中学校の中心的な教師として登場した林茂生です。林茂生、台湾人として一番最初に東京帝国大学を卒業した、台湾を代表する知識人だったんです。ちなみに、中華民国はこの 45 年当時、河北省とか山東省とか、たくさんの省があり、台湾はその一部ということになりましたから「台湾省」という呼び方をしたんです。



林茂生は、この「台湾省」の民衆の代表として演説しました。今みんな祖国の光が戻った。祖国に戻ってよかったと言ってるけど、それはかつて台湾を失うという歴史があったからであり、台湾を割譲して手放したのは、当時の清国の国民に団結がなく、「敵人」としての日本に付け入る隙を与えたからであると語っています。この発言は非常に重要な意味を持ちます。先ほど 1895 年に清朝が台湾の人たちの全く知らないところで台湾「割譲」を決めたとお話ししました、それに対して台湾の人たちは見捨てられたという意識を持った訳です。中国に戻ってよかったねと言うのだったら、あの時、台湾を捨てたのは間違いだった。ごめんなさいというべきだ、という思いを込めた演説と理解できます。捨てられた土地に残された民である、私たちの歴史をわかってほしいという思いを表した訳です。

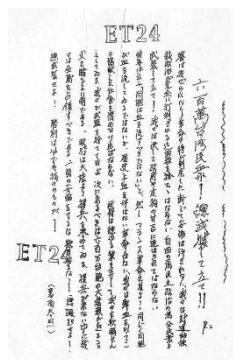
具体的には、中華民国の一部であるのは前提として受け入れるにしても、台湾は独自の歴史を歩んできたのだから、その中で高度な自治というのを認めてほしい。台湾内のことは台湾人に決められるようにしてほしい。林茂生をはじめとして、台湾人の多くがそのように考えていました。と

ころが、実際に起きたのは、台湾の人が期待したのとは全然違うことでした。一言で言うと、台湾人は相変わらず「二等国民」として参政権を制限される。ただ、かつて日本人のいた地位に戦後大陸から移住した人—外省人—と呼びました—が座っただけではないかと思われる訳です。「国語」もかつては日本語だったけど、今後は中国語を国語として話せと言われる。ですが、当時の台湾人のマジョリティは中国語をしゃべれない訳です。もともと台湾の言葉は福建省系の言葉です。北京語をベースとした中国語と文法は似ていますが、発音が全然違うのはもちろん、ボキャブラリーレベルでかなり違うんですね。当時の台湾人の圧倒的多数は中国語がわからなかったんです。林茂生のような海外を歩いたエリートだけが話せた訳ですが、今度はいきなり中国語を話せという訳です。

いまから 20 年近く前、日本時代に教育を受けたある台湾人のおじいさんにインタビューしましたが、戦後役所に勤めていきなり中国語で文章を書けって言われても書けない。日本語でしか書けない。しょうがないから日本語で書いて、ひらがなだけ消して出した。そしたら漢字だけになるからです。文法は全部いい加減、でもそういう形でしか文章を書くことができなかったという訳です。日本から解放されたと思った喜びが大きかっただけに、こうした事態への幻滅も大きくて、1947 年には大規模な反政府反乱が台湾中で起きます。

■2・28 事件(1947 年)

反政府反乱のきっかけは極度のインフレと食糧難です。さらに、日本時代と同様に統治機構から排除されたこと、国軍兵士という大陸からやってきた軍人の横暴、特に女性に対する性暴力、そうしたことへの怒りが大きかったと言われています。細かい経過は省きますが、台湾の各地で軍の武器を奪って、民衆が街を占拠する、そうした事態が起きます。軍の側は 3 月 8 日に大陸から援軍が到着したのを契機として、無差別的に民衆を殺して鎮圧する事態が起きます。当時、台湾の人々の間に撒かれていたビラでは「**六百萬台湾民衆総武装して立て！石ころでも投げる。このままで私たちは皆殺しにされるだけだ**」と書いています。なぜ日本語で書いているんですか。日本が大好きだったからとか、そうじゃない。先ほどもお話ししたように、日本語でしか書けない。そして、大陸から来た「外省人」には日本語は通じないけれど、もともと台湾にいた人の間には日本語が通じる訳ですね。



■「台湾独立を妄想」した罪

このように「革命の時は来た」という空気のなかで、反政府反乱に立ち上がろう、と多くの人が武器を持って戦いますが、3 月 8 日に南京から派遣された軍隊の上陸が始まって、しばらくして戒厳令を施行して、知識人を中心に 2 万人近くの台湾人を処刑します。

知識人を中心にとというのは、この反政府反乱に実際にどの程度加わったのかというのは細かく詮議してしない学者、記者、画家、弁護士という社会的に影響のある知識人が、自宅にいてもひっそりとえられて、駅前で公開処刑されることが続きます。犠牲者のなかには、先ほどお話しした林茂生も含まれています。

林茂生が 1946 年夏に、息子林宗義に語った言葉として、このような言葉があります。「台湾は一日にして、また二等国民に戻ってしまった…。不幸なことに、戦争の終結から今に至るまで、台湾はほとんど完全に孤立無援の状況にある」。林茂生が処刑される直前に、息子に語った言葉はこういうものです。「日本人は一般大衆の生活水準を確かに改善したかもしれない。生産力が上がったかもしれない。しかし、私たちが自分自身を管理し、政治に参加することを意図的に防いだ。さらに不幸なことは、台湾人がただ一種類の政治体制しか知らないことである。それは植民政府である」。

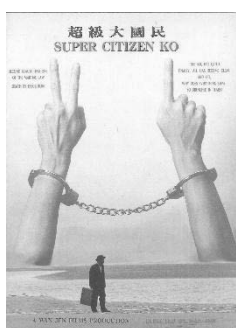
これはどういうことかという、台湾総督府も、戦後の蒋介石の政府も、同じように植民地政府であり、外来政権であり、台湾人を「二等国民」として差別する政府であると言っている訳です。3月11日未明、特務機関が自宅から連行し処刑しました。罪状は「米国領事館に接近し、国際的な干渉を企図し、台湾独立を妄想した」ことなどでした。林茂生個人としてではなく、この反政府反乱の事態収拾のために立ち上げられた委員会がアメリカ領事館に要請書を出しています。そこで「私たちはいったん、国連の信託統治下に置かれて、台湾人の運営をどうするかを、住民投票で決めさせるようにしてほしい。アメリカがその仲立ちをしてほしい」という趣旨のことを書いています。カイロ宣言で、私たち台湾人は中華民国に帰属すべきだと決めたのは、アメリカの大統領だからアメリカの責任もあるんだ、なんとかしてくれという訳です。台湾にあったアメリカ領事館は共感を示しながらこの要請書を受け取りますが、南京にあったアメリカの大使館は台湾人の言うことを相手にする必要はない。私たちは独自の政府を持っているところだけを相手にすればいい、独自の政府とはとりあえず蒋介石の政府だという論理で、台湾人を見捨てることになります。

■「白色テロ」の時代

1949年戒厳令を再び宣告(1987年まで継続)

この1947年に反乱鎮圧のさなかにも布告された戒厳令はいったん解除されますが、1949年に再び戒厳令が宣告されます。先ほどお話したように、中国大陆での内戦で蒋介石が破れて台湾だけを支配するようになると、「台湾独立」と言い出す者がいないか、中国共産党に内通する者がいないかと恐れて準戦時体制をとり続けます。蒋介石にとって一番恐ろしいのは、台湾独立運動と共産主義がつながること。戒厳令とは怪しげな本を読んでいたらちょっと来い、と言ってすぐに懲役10年、悪くするとすぐに銃殺というようなことができてしまえる体制です。軍事上の敵味方の判断に基づいて、あらゆる憲法上の人権保護措置を停止してしまう。そういう状況が、台湾で、38年間も続きました。世界で2番目に長い戒厳令ですね。その間、日本人の側では、かつて植民地支配とかしたかもしれないけど昔のことだから、台湾のことは関係ない、さようなら、元気にやってくれやという感じです。台湾の人はどう思っていたのか非常に複雑です。台湾の人々の声は、社会の表に出ないようにされ、みんな黙らされた。ちょっとでも政治的なことを言ったら、殺されるといふ恐怖感が社会全体を支配するようになりました。

蒋介石の率いる中華民国政府は、日本の台湾植民地支配責任を問おうとしませんでした。蒋介石が日本に問おうとしたのは、例えば南京虐殺です。日中戦争の責任は問おうしました。でもアメリカにやめとけと言われて矛を収めました。台湾植民地支配責任は、そもそも蒋介石にとって重要なことではありませんでした。中華民国は台湾だけを支配するようになってからも、中国全土を代表する政府ということになっていたからです。先ほどの林茂生のような人物がもしも生きていたら、本当は日本の植民地支配を告発し、蒋介石を告発するはずだった。でも、そうした人物が軒並み殺されてしまった訳ですね。そういう状況に乗っかって、日本は植民地支配責任に向き合わないですんできた訳です。



その間、台湾の人々はどんな歴史を過ごしたのか。「超級大國民、という映画があります。あらすじを紹介すると、1950年代に読書会に参加していた人間が警察に捕まった主犯は私の友だちであるあいつだと言ったために自分は助かったけど、その友だちが銃殺に処された。その後40年の歳月を経て、牢屋での生活と精神病院と養老院での生活を経て、台湾が民主化された1990年代になって憑かれたように動き始めます、あの友だちはいつどこでどうやって処刑されたのか。その跡を訪ねて友だちにごめんなさいというための旅の歴史です。このおじいさんがやっと友だちの墓を探り当てたときにいう言葉が日本語で「ごめんなさい」なんです。この人たちにとっては日本語が第一言語になってしまっていると言えます。

台湾というと日本大好きみたいに言う人が多いみたいな印象が多いと思いますけど、それは若者たちにとっては、クレヨンしんちゃんとかサザンオールスターズとか日本のサブカルチャーの影響が強いといえます。年配の人で日本の植民地支配に大人としてひどいことをされた経験のある人はもうほとんど亡くなっている訳ですね。今ご健在な方は、日本の植民地時代まだ少女だった方たちです。そうした人たちは日本植民支配がどんなにひどかったかっていうことは、あんまりリアルな記憶としてはない訳です。むしろ、その人たちに残っているのは日本に見捨てられたという思いです。日本に見捨てられたあと、蒋介石政府のもとでこんなにひどい経験をした、日本の人にそれをわかってほしいという思いがすごく強くあるように思います。そのため、蒋介石の政権に比べればまだ日本の支配の方がマシだったという思いもあるし、日本人だったら本当はわかってくれるはずだという、すごく複雑で+屈折した思いがある訳です。

■沖縄における「奴隷解放」～伊波普猷没(1947 年)

ここで沖縄のこともについても簡単に振り返っておきます。先ほどの伊波普猷は 2・28 事件の時、1947 年に亡くなります。「地球上で帝国主義が終わりを告げるとき、沖縄人は『にが世』から解放されて、『あま世』を楽しみ十分にその個性を生かして、世界の文化に貢献することができる」という言葉を遺しています。伊波普猷は 1895 年ヤマト(日本本土)に協力する側で、清国に勝ってほしいと思う人たちに銃を向ける側にいた。それから 50 年を経て、沖縄はまだ解放されていない。地球全体から帝国主義が消えなければ沖縄は解放されないという言葉を書き残して亡くなります。ですが沖縄に起きたことは、米軍の占領を継続するということです。これは「第二次琉球処分」というように云われます。日米戦争中の沖縄、アメリカに占領されて、とりあえずアメリカの占領下にあった訳です。でも、講和条約が結ばれるときに、そこから解放されるはずだと思っていた沖縄の人はたくさんいた。ところが、沖縄における米軍占領は継続された。これは、沖縄の人から見れば第二の琉球処分だったのです。その後、東アジアは朝鮮半島では朝鮮戦争、中国と台湾が対立して、沖縄に駐留する米軍がこれらを指揮するような構図がつけられます。この対立構図の中で毛沢東を支持するか、蒋介石を支持するかというように問題が単純化されて、台湾の内部で蒋介石に抵抗する人、反発する人々の思いは見えなくなってしまった訳です。

■米中・日中共同声明(1972 年)

さらに 1972 年が歴史の大きな節目となります。アメリカはこれまで、必死に蒋介石の中華民国を支えてきた訳ですが、いきなり中華人民共和国を支持しますと転換します。これはもう当時は驚天動地の出来事だった訳です。日本と中華人民共和国との国交正常化もアメリカに倣った訳です。

アメリカや日本の思惑は何かといったら、いろいろあるんですけど、蒋介石の下で蒋介石に抵抗している台湾民衆のことはほとんど眼中にありませんでした。中国大陸の方が市場が大きい、そこに進出した方が商売がうまくいこうという思惑がありました。中国はといえば、当時、同じ社会主義国でもソビエト連邦との対立がすごく深刻になっていたために、アメリカと手を結んだ方が有利であるという思惑がありました。アメリカからすると、当時ベトナム戦争が泥沼化していた。中国がベトナムを助けていることに困っていた訳ですが、中国がベトナム支援から手を引いてくれればということで、アメリカと中国の利害が一致した訳です。

日中国交正常化のとき、私は 10 歳ですけど、うっすらと記憶しています。バンザーイみたいな空気が記憶に残っています。でも、ちょっと待てよと思いませんか？当時、ニクソン大統領はベトナム人民衆の上に大量の爆弾を雨あられと落としていた訳です。72 年でもまだずっとベトナム戦争が続いているんです。その中でニクソン大統領と毛沢東が握手した訳です。例えばベトナムとの関係一つをめぐっても日本から見えにくい問題がある訳です。

もう一つは台湾の問題な訳です。沖縄もそうなんですけど、この時に日中共同声明で「台湾は中華人民共和国の領土の不可分の一部」であることを日本政府は「十分理解し、尊重する」とい

声明を出します。「十分理解し、尊重する」というのは、「承認」とは異なる意味です。ですが、日本政府は中国政府が言っていることを理解して尊重するけれど、もっと別の立場での意見を理解し、尊重するということもありうるという含みを残して、あえて曖昧な表現を取ったことに注意が必要です。

■「台湾処分」としての日中共同声明

台湾の人は日中共同声明をどう思ったんでしょうか？林景明さんという方がおられます。もう亡くなられましたけども、戦争中に日本軍に召集されてまだ 15 歳なのに学徒特設警備部隊に召集された経験を持ちます。沖縄でもやはり 15 歳で鉄血勤皇隊として兵隊にとられた男子学生がいたことは、皆さんご存知かと思います。台湾でも 15 歳で兵隊にとられた人たちがいました。

戦後は今度は国民党の軍隊に無理やり入隊させられましたが、軍隊の中で国民党のブラックリストに入れられて、かろうじて日本に亡命します。

亡命した日本で「お前たち台湾人はもう日本人ではないから関係ない。不法滞在者は強制送還するぞ」と脅かされます。林景明は強制送還されたらほぼ必ず死刑にされるような立場でした。これに対して、林景明は「今まで日本人だ、日本国民だ、天皇陛下の赤子だと言って日本軍兵士まで召集したのに、戦争中に戦えといった蒋介石のもとになぜ追い返されなければいけないんだ」と主張して、彼はずっと日本で強制退去を不当とする裁判を戦い続けます。

日本での言論活動の中で彼は中国国民党を批判し、日本政府を批判すると同時に中国政府も批判します。特に彼が憤ったのは日中共同声明です。日本人の多く、特に左翼的な人々が台湾人は中国と同一民族だから中国人によって解放されるべきだと言ったり、そうでなくても世界革命のために中国の支配を受け入れるべきだと言ったりしているのは、いずれにしても「日本の国益のために台湾を中国への賠償物にしようという野望をカモフラージュする屁理屈に過ぎないのではないか」と問いかけます。

日中戦争が膨大な被害をもたらした戦争であることは誰にもわかることです。あの戦争にかかわる賠償を日本はしましたか？していないんです。1952 年、蒋介石の中華民国政府との間で国交を結んだとき、蒋介石は賠償を求めようとして数兆円単位の賠償を要求しようとしたのですが、アメリカが反共包囲網をつくるのを優先させる圧力をかけたこともあって、蒋介石は賠償を求めなかったのです。毛沢東の中華人民共和国政府も、賠償額を計算はしてました。今のお金で 5 兆円とか 10 兆円とか、それは下らないなって計算をしていましたが、賠償を要求しませんでした。

その代わり毛沢東の政府が要求したことがいくつかあります。台湾は中国の一部であるということに理解を示しなさいということも、その一つだった可能性があります。外交文書に日本が賠償を免れるために台湾は中国の一部という主張に理解を示したと書いてある訳ではありません。ですが台湾人から見ると、中国が日本に賠償？あんなに膨大な被害を出し、賠償を要求しなかったのはなぜ？「日本の国益のために台湾を中国への賠償物にしよう」というふうに受け取られた訳です。

ちなみに林景明さんは、『日本統治下台湾の皇民化教育』（高文研、1997 年）という本を日本語で出しています。今も発売されていると思います。とてもいい本ですので、お薦めいたします。



林 景明
(Lim Kingbing)
[日本読み:りん・けいめい]

■日本における台湾人政治犯救援運動

細かいことは省きますが、日本社会に対する林景明さんの訴えがすこしずつ浸透して 1977 年によく日本社会の中でも「台湾の政治犯を救う会」が成立します。これは、政治的な立場性を超えて、とにかく台湾で独立を求める人であっても、中国共産党を支持する人であっても、これは政治的な思想信条ゆえに、政治犯として台湾に強制送還されて処刑されそうな人々を助けるために創設された団体です。

■台湾民主化への長い道のり

「台湾の政治犯を救う会」には、日本のキリスト教徒も深くかかわっていました。例えば、1971 年 ニクソン訪中が発表されたときに合わせて、台湾基督長老教会は「国是声明」を出して、台湾は北京政権に売り渡されるようだけど、私たちの運命を「北京政権」に委ねるつもりはない。「私たちはこの島々を愛し家郷とみなす。私たちの希望は平和と自由と公義の中の生活である」。

この「公義」という言葉は中国語のままですが、日本語に訳せば「正義」にあたります。これは命がけでした。当時台湾は戒厳令下である。しかも戒厳令を敷いている政府は、あくまでも中国全体を代表する政府であることを標榜し、台湾人意識のようなものを敵視している。そうした状況のなかで「この島々を愛し、家郷とみなす」というのは、ある意味では当たり前のことでありながら、中華民国の公式のイデオロギーへの挑戦という意味を持ちました。

この声明の作成に参加した台湾人の牧師さんの話を直接聞いたことがあります。声明を発表する前に、自分たちよりも自分たちを取り締まる警察官が怯えていたと言います。この島を「家郷」とみなすなんて言ったら台湾独立派の陰謀として死刑にされるかもしれない。それでもいいのか？ということで、むしろ警備していた人々が震えていたということです。日本統治時代には台湾の長老教会は神社参拝問題などでひどく弾圧されて、教会の中の人間関係にも亀裂が入りました。ですが、そうした弾圧をされる経験を経て、台湾のキリスト長老教会は 1970 年代には民主化運動の最前に出て闘い始めることになります。

■「渡田正弘氏の釈放を求める会」設立

1979 年には民主化を求めている人々が雑誌『美麗島』主催のデモ隊に参加し、反乱の容疑で関係者の一斉逮捕が行われます。美麗島事件と言われる事件です。当時台湾基督長老教会のトップだった高俊明牧師も、容疑者を匿った罪で逮捕されました。

2000 年に台湾で戦後初めて国民党から民進党に政権交代が実現したときに、総統に就任した陳水扁覚えているかもしれませんが、美麗島事件の時の弁護士だった人です。今も台湾の政治家なかにはこの美麗島事件の民主化運動のリーダーだったという人がたくさんいます。これは、韓国の光州事件と同様、台湾における民主化運動の最も大きな盛り上がりを示した出来事でした。

この美麗島事件の際に先ほどお話しした「台湾の政治犯を救う会」が、渡田正弘という若者を事件の調査に派遣します。当時、台湾に日本の新聞社の支社は産経新聞しかありませんでした。日中国交正常化の時、中華人民共和国が朝日新聞や毎日新聞に対して、北京に支局を置くんだったら台湾においてはいけないという条件を付けたために、産経以外の新聞社はすべて台湾から引き上げました。そのために台湾の情報が伝わってこない訳ですね。そういう状況の中で、直接的な情報を得ようと渡田さんという若者を派遣したら、渡田さんが帰りがけに捕まって逮捕を受けて拷問されるはめになります。

これをなんとかしようと「渡田さんの釈放を求める市民の会」が成立します。その設立準備員 10 人中に相馬信夫名古屋教区長(当時)が入っているほか、「カトリック教皇庁正義と平和委員会」アジア地区代表浮田久子氏や、「カトリック正義と平和協議会」会長森田宗一氏が名を連ねています。

1970 年代には台湾にかかわるカトリックの動きは目立たなかったのですが、日本キリスト教団の中では、台湾民主化運動に関心を持つ人々が増えていました。美麗島事件では渡田さんが上智大学の出身だったために上智大学の関係者が動いて、カトリック教会が動いたということのようです。

渡田さんは短期間で釈放されますが、台湾にかかわる日本の認識はそれほど深まったとはいえません。例えば朝日新聞の報道の見出しは「台湾で邦人逮捕、高雄暴動に関連か」となっています。毎日新聞では、「台湾旅行の日本青年拘束 高雄暴動事件のメモ所持」となっています。先ほどの美麗島事件は、どう考えても戒厳令下の独裁政権に対して人権と民主と正義を求めた活動です。でも、毎日新聞も朝日新聞も「暴動」として報じています。渡田さんは暴動に共鳴する

[illegible]

徐兄弟に鉄鎖なお固く

特赦の対象外



「せめて刑期を終えた弟の役柄だけでも返してほしい」と訴える呉己順さん

＝京都市西京区の自宅で

[illegible]

台湾で邦人逮捕

[illegible]

過激派として報道されています。ちなみに、同じ日の同じ紙面の記事に、徐勝・徐俊植兄弟にかかわる記事が掲載されています。ご存知の方もおられるかもしれませんが、徐勝さんたちは京都にお住まいだった方で、在日韓国人の方です。韓国に行った

とき、北朝鮮のスパイとして逮捕されたためにその後、「徐兄弟を救う運動」が日本の中に長く続けられる訳です。私の周りにもその運動にかかわった方がたくさんおられます。その徐兄弟を救うべきだという紙面の記事のすぐ横に台湾の民主化運動を「高雄暴動」と表現する時期が出てくる訳です。

韓国をめぐる動きについては、やはりご存知の方もおられるかもしれませんが、この時期、岩波書店の『世界』という雑誌に連載された T・K 生「韓国からの通信」で韓国の民主化運動の様子は時々刻々リアルタイムで伝えられていました。今ではその民主化運動の中心になっていた池明観という牧師がその文章を書いていたとかまでわかっています。この民主化運動は、教会を中心とした動きです。最近わかってきたことは、韓国の民主化運動のギリギリの記録を、いろんな人間が隠し持って日本に持ってきて、出版社や新聞社に渡して、出版社が「韓国からの通信」として載せた訳です。出版社に渡るまでは、同時期に実は台湾でも同じことが行われていたんです。三宅清子さんという方が有名ですが、台湾の政治犯のために極秘のメモを隠し持って日本に持ってきて岩波書店に届けたりしました。でも、岩波書店は決してそれを取り上げようとしませんでした。なぜか、台湾は中国の一部だからです。台湾は中国の一部という考え、解釈もあり得ると思います。そうした観点からすれば、台湾における民主化運動は台湾独立運動とも結びついていたので、ある種のうさんくさい運動としてみていた可能性があります。それでも、やはりこれは人権と民主と正義を求める声だ、そのようなものとして伝える道はなかったのかと思います。

東か西か、社会主義が資本主義か、そうした対立軸において社会主義中国を支持する。そうした考え方が、この人権を奪われた人々、小さな島の人々の声よりも優先されていたとしたら、そこにはとても大きな問題があるのではないかと。私自身は岩波書店の『世界』にもいろいろな文章を書かせていただいたりしましたが、そうした文化にどっぷり浸かっているだけに、これはまずいのではないかと同時に、いつまでも日本は変わらないのかと感じる訳です。

■まとめに代えて

最後にあらためて川満信一さんの文章を読みたいと思います。1972 年 2 月、まさに日中国交正常化が実現して日本の保守は中国市場に進出できると喜び、左翼は社会主義中国をこれで認めることができると日中国交正常化歓迎ムードで湧いていた中に、川満さんはこういうふうに書いています。

中国は、台湾は中国の一部だと言うけれど、「日清戦争の結果として、なにはともあれ、日本と清国間の和睦の犠牲に供されたときから、中国大陸の民衆と台湾民衆の間には、歴史体験の大きな隔たりができてしまったことは事実であり、その体験の相違を基礎に据えなければ台湾民衆

の帰趨は論じられないはずである」。自らの意思で自らの歴史を決めていくことができない。「島孤の少数民族」として、台湾民衆の苦悩や屈折した感情が「この沖縄では痛いほどにわかる」。

今日は歴史の話をしました。大事なことは、台湾民衆は全然違う歴史を経験してしまった、それはもう元に戻せない、ということです。その元に戻せない歴史の重みを前提としなければ、台湾の帰属など論じられないはずだということです。そしてまた、台湾の人々の思いが痛いほどにわかる。なぜなら、沖縄も同じ経験をしているからだと記しています。

先ほどの林景明さんの文章で左翼的な知識人の名前を一人ひとりあげて大江健三郎はダメだ、小田実ダメだというように語っているんですが、川満信一は「すごい、これこそが良心だ」と書いています。それは多分偶然ではない。そこにはやっぱりとても大きい共通項、台湾と沖縄の人々が歴史から生まれた共通項があるのだと思うんです。川満さんはこうも書きます。「中国政府が台湾をもっぱら領土問題として位置づけるならば、それは中国政府がこれまで糾弾してきたはずの『大国主義』路線と変わらないのではないかと。もし中国側に大国主義の発想があるなら、日米国家権力への戦いととも、その大国主義路線とも闘うほかはない」。川満さんは社会主義者でした。1950年代には社会主義者として、米軍と本当に体を張って戦った人でした。そうした中で、中華人民共和国への期待を持っていました。中国はすべての被抑圧された民族の人民の解放を援助することを信じてきたのに。でも台湾は違うと言うんだったら、それは大国主義と同じではないかと考えた訳です。戦うほかはないっていうのは、この川満さんのこの時点での宣言です。今日のお話の最初に2013年の川満さんの発言をご紹介しましたが、その後、主義を批判する思いは川満さんの中で強まっていったとみてよいと思います。

川満さんは中華人民共和国に批判の矛先を向けると同時に、日本本土、ヤマトの人間は右翼も左翼も問わず、何を言ってもわからないという絶望感に満ちた思いを、彼の文学作品や詩作品を通して表現します。と同時に先ほどの1972年の論説では率直にこう書いています。日本人がアジアに向き合おうとするとき「相手を知らうとする意欲の背後に、国益的感性をべったりくっつけたまま、揉み手の対応に出るか、高慢に臨むかを打診するような関心の持ち方は、近代史の過程で植民者としての体験しか持ち得てこなかった日本(本土)国民の無意識の感性として、国外に向かうときの、とくにアジアに向かうときの視角を呪縛してしまっている」。相手が強いと感じるときには、「国益的感性」をくっつけたまま「揉み手の対応に出る」。今でも日本の台湾問題を論述するかぎ、左翼的な人々の中でも中国との貿易が重要だそれが日本の国益にかなう、台湾の言うことなんか聞く必要はないという人がいます。それは日本の国益、特に経済的利益を優先しての論だということをしっかり自覚してほしいと思います。川満さんから見ると、日本本土の人間の態度はそうやってそろばんを弾いて、相手が弱いと見たら一顧だにしない、相手にしない、その両極端に触れているということになりますそれは近代日本が植民地にすることはあっても、されたことはないからだと書いている訳です。

もちろん、植民地化されたことはなくても、例えば川満信一さんの書いたものを読むという作業を通じて、植民地化された人々の痛みというものに少しでも近づくことはできるはずだし、川満さんもそうしたことを期待されていたんだと思います。今日のお話が台湾や沖縄のような島々に生きる人々に寄り添った生き方を追求していくひとつのきっかけとなれば幸いです。どうもありがとうございました。

沖縄・フクシマ・戦争の爪痕

8月9日⑤—10日⑥
河原町教会 ヴィリオンホール

報告 事務局

今年（2025 年）の正義と平和協議会の「戦争と平和写真展」は、「沖縄南西諸島の要塞化」の写真、「ガザ・パレスチナ歴史と現在」のパネル展、福島「異常多発が続く福島原発事故後の小児甲状腺がん」の統計による資料に加え、黒田雅夫さんによる絵本『今を生きる 満州からの引き揚げの記録』の原画も展示された。期間中、120 名を超える方々が来場、展示に熱心に見入る姿が見られた。



黒田雅夫さん

講演会『今を生きる』

2 日目の午後、黒田雅夫さんご子息の毅さんを会場にお招きし、雅夫さんの引き揚げの体験を、毅さん作成のスライドとともに聞き取る講演会を実施しました。黒田さんは亀岡市在住の 88 歳。

1940 年代、吉林市南部の廟嶺^{びょうれい}に家族で入植し、敗戦後、国民学校 3 年生の時に引き揚げた経験を、長年、語り部として伝え続けていられています。炎暑の中、およそ 40 名の参加者は、黒田さんの語られる引き揚げの記憶に耳を傾け、戦争がもたらす過酷な現実を心に刻み、改めて平和への祈りを共有するひとときを過ごしました。

パネル展 「ガザ・パレスチナ歴史と現在」

ウトロ平和祈念館よりパネルをお借りして、ガザ・パレスチナの歴史と現在をより多くの人々にお伝えしました。



◆図録販売のご案内

ウトロ平和祈念館のガザ・パレスチナ特別展図録は、当館オンラインショップで買い求めいただけます。展示内容をすべて収録し、日本語、ハングル、英語の 3 か国語に対応。全 32 ページ。



フクシマ「異常多発が続く福島原発事故後の小児甲状腺がん」

「第 39 回原子力発電問題全国シンポジウム」にて発表された資料を大倉弘之先生よりお借りして展示しました。統計による貴重な数値の数々を見ることが出来ました。

沖縄「沖縄南西諸島の要塞化」

今回もオキナワ平和サポートより要塞化が進む南西諸島の写真を展示しました。京都にいる私たちからは考えられないスピードで進められていることが毎年の写真からうかがわれます。



【来場者の感想】



■『今を生きる』の展示で、満州で、とてもひどいことや辛いことがあったということをわからされました。この写真展を見て、戦争なんてダメだ、二度と起こってはいけないと思いました。

■戦争は絶対あきません。人間はなぜ仲よくできないのでしょうか。夫の遺骨はまだ帰ってきていません。フィリピンレイテ島で眠っているのでしょうか。

■毎年見せてもらっています。『今を生きる』の

展示、手描きの絵が素敵でした。

■黒田さんの絵画、実際の暮らしぶりが想像できてよかった。毎年来させていただいて、展示内容に感動しています。

■黒田さんの実体験を聞かせていただき、当時の状況を詳しく学ぶことができました。戦争のもたらすひどさ、開拓の取り組みの矛盾など、もっと知らなくてはいけないことが多いと気づきました。

■戦争がどれだけ子どもや女性、一般人の犠牲を強いたかがよくわかりました。未来の世代が、同じ苦しみに引き込まれないよう学び、祈り、行動しなければならいと痛感します。

■黒田さんのお話を多くの方に聞いてほしい。ご健康をお祈りします。

■黒田さんお話胸がつまりました。よく無事に帰って来られお母さんもきっと喜ばれているでしょう、ほめて下さっているでしょう。しかしよく覚えておられる事に驚きです。

■黒田さんと息子さんのお話に感銘を受けました。満蒙開拓団の人々の「戦争はまだ終わってない」という言葉、召集されないはずだったのに開拓団員が召集された理不尽さに怒りがわいてきます。

■今年も参加させていただきました。黒田さんのつらいつらいお話もお聞き出来て貴重なひとときとなりました。今年は戦後 80 年。京都にいたら、なかなか戦争体験者の方々のお話を聞くことが出来ないので良い時間でした。



現地学習会

渡来人歴史館と カトリック大津教会を訪ねる



報告 古屋敷 一葉

11月8日(土) 暖かい日差しのもと、22名の参加者がJR大津駅前に集合しました。そして5分ほど歩いたところに渡来人歴史館があります。大澤重人さんの説明を受けながら展示を見ました。

最初に大きな地図があり、人類はアフリカで誕生し、約7万年前に世界へ拡散したことが示されていました。日本列島へは氷河期に到達し、その後の文化や文明、文字、宗教は主に大陸から朝鮮半島を経由してもたらされました。古代において中国は先進国であり、日本は朝鮮半島を介して多くのことを学びました。また、世界地図を逆さに見ることで、日本海側が文化の「表玄関」であり、海が人々や文化が往来する道であったという視点が得られました。



弥生時代、中国の戦乱を逃れた人々が稲作技術を日本列島に伝え、渡来系弥生人となりました。彼らは先住の縄文人と混血し、現在の日本人を形成したということです。5世紀以降、さらに多くの人々が日本に渡ってきました。彼らは鉄の生産、乗馬、須恵器などの先進技術をもたらしました。また、彼らの知識や技術は、日本の律令国家の基礎固めに重要な役割も果たしました。彼らは日本各地に定住し、高麗(こま)神社や関連地名などの痕跡を現代に残しています。また、滋賀県は、奈良や大阪に劣らず渡来人が多く住んだ地域だったということも新たな発見。平安時代の征夷大將軍・坂上田村麻呂や天台宗の開祖・最澄も渡来人の末裔であり、日本の歴史に大きな影響を与えたとのこと。日本は大陸からの文化を一方的に受け入れるだけでなく、例えば渡来人がもたらしたかまどは根付いた一方、床暖房であるオンドルは気候の違いから根付かなかったように、文化を取捨選択しながら取り入れたようです。



やがて時代が下り、豊臣秀吉による朝鮮出兵は朝鮮に甚大な被害をもたらし、多くの陶工や学者などが日本へ連れてこられました。九州や山口の著名な陶磁器産地の多くは、朝鮮の陶工たちによって始まっています。江戸時代に入ると、朝鮮通信使の往来が始まり、約200年にわたり友好関係が続きましたが、朝鮮半島から日本へ渡る使節のみが派遣されました。これは、朝鮮側の侵略に対する不信感からであったとのこと。

近代に入り、日本は1910年に韓国（大韓帝国）を併合し、植民地支配を開始します。日本の植民地政策によって土地を失い、職を求めた人々や、戦争末期の徴用によって、1945年の敗戦時には200万人以上の朝鮮人が日本に住むという状況になりました。彼らは日本国籍を与えられながらも、憲法の適応外にあり、不平等な状態に置かれていました。敗戦後多くの人々が帰国しましたが、数十万人が日本に残りました。そして1952年のサンフランシスコ平和条約発効に伴い、彼らは一方的に日本国籍を剥奪され、外国人として多くの公的制度から除外されました…ここまで聞くと、過去に恩恵を受けた人々に対して、裏切ったような気持ちになり、悲しく残念に思えました。



日本人も元を辿れば大陸から来た人々で、皆同じ人間ではないかと思うと、神は人をよきものとして人をつくり、祝福されたことを思い出しました。人は神によって等しく愛されていたはずですが、自分と他者の間に境界線を引き、争いや差別を生みました。現代社会においては「〇〇ファースト」といった排外主義傾向が見られます。古代の日本では渡来人を排除せず、彼らもまた自らの文化を一方的に押し付けることなく、

重層的な共生関係を築いていたということを聞くと、今でも人は「互いに愛し合う」こともできるはずではないかと思うのですが…その後に訪問した大津教会での分かち合いでもそのことを話しました。「私たちを平和の道具にしてください」と湖畔の聖母に取り次ぎをお願いしました。



（京都教区報 2026 年 2 月号に掲載されたものです）

希望は欺かない・・・はずだ

古屋敷 一葉（援助修道会）

2025年10月11日から13日まで仙台教区で正義と平和全国集会が開催された。テーマは「希望は欺かない～大震災から14年つなぐ思い 国籍を超えて歩む平和への道～」であった。11日は福島、女川、大船渡へのフィールドワーク、12日は基調講演とシンポジウム、13日は分科会、派遣ミサ、ネットワークミーティングが行われた。（公式な報告はカトリックニュースジャパンなどを見ていただきたい）

私は韓国から来られた生態環境司牧に関わるメンバーら22名、通訳のシスター奥田とともにマイクロバスで大船渡へ向かった。ガイドの菅原圭一さんや、伝承館のガイドさんの通訳をするように言われ、戸惑いつつも、なんとか主旨はと伝えられたかと思う。大船渡へは2012年にボランティアに行っていたが、新しい建物が建ち、ちょうどお祭りも開かれていて、活気が戻っていた。

昼食後、津波の被害を受けた建物がそのまま残されているのを見つつ、土を盛って高くしたところに新たに街が作られているという話を聞きながら陸前高田へ。そして奇跡の一本松の近くには、津波の被害を後世に伝えようとする伝承館ができており、そこで説明を受けた。参加者は地図を見ながら、海岸に津波が押し寄せた範囲の広さに驚いていた。また、当時の映像を見て、重い表情をしていた。海の中にまだ残っている人もいる。



大船渡教会に戻って、教会の変化についての話を聞いた。もともとフィリピンから多くの女性が嫁いできていたのが、震災後、教会に集まってきた。その後、ベトナムからの研修生やアメリカからの英語教員が来るようになり、国籍を超えた共同体が作られている。

韓国のある司祭が言っていた。「初めは大船渡に行きたいとは思っていなかった。でも行ってきて良かった。あれほど津波の被害があったとは知らなかったし、あのよう危険なところに原発を作ってはいけないとわかった」。

そう、原発。これが基調講演とシンポジウムのメインテーマであったと思う。福島に移りカリタス南相馬で司牧を続けている幸田和生名誉司教の講演。私が一番心に残ったのは、「避難ということの過酷さ」と「人と人との引き裂かれる体験」。福島原発事故のせいで多くの人が避難した。津波で亡くなった人よりも関連死、つまり避難することによって亡くなった人が多いという。避難は長期化し、元の家に戻るできない人も多く、孤立する人が増え、共同体がなくなっていった。家族の間でも、避難した者、残った者に分かれた。避難先では差別もあった。そしてあの頃、教会の中でも意見が分かれたことを思い出す。「残っても大丈夫」「残っている人に寄り添うべきだ」「いや、避難すべきだ」。何が正しいのかをめぐる争い。これも原発事故が生み出したものだった。

舘脇章宏さん（「みやぎ脱原発の会・風の会」事務局長）は、政府が原発回帰を進めている中で、女川原発再稼働の危険性、破綻した核燃料サイクルについて丁寧に説明され、私たちは次の世代に何を残すべきかを問うた。中筋純さん（「おれたちの伝承館」館長）は、甲状腺がん訴訟を起こした女性の意見陳述を朗読し、傷ついたまま忘れ去られ、見えなく

されている存在を忘れてはならないと訴えた。時が経つにつれ、自分の関心も移り変わり、いまだに解決されない問題や、痛みを抱えた人々の前を通り過ぎるようになってしまっている。これは原発が存在する限り、自分の身に起きるかもしれないことなのに…自分の無責任さを反省した。

ある参加者は言う。「癒えないものを置き去りにしたまま『なかったことにしようとする』、『向き合いたくないものに蓋をしている』現実をヒリヒリと感じる。この現実は、日本が負っている戦争責任の問題、また私の周りを取り囲む大小の様々な出来事と地続きであること、同時に『無関心』と『向き合いたくないものに向き合わない』という加害性は、この私の中にもあることにも気づかされている」。

懇親会では、全国の正義と平和グループの参加者たちが自己紹介をしつつアピールをした。その中でスパイスの効いた言葉を述べた重鎮もいた。「自分たちの教区では正義と平和協議会がなくなった。でも、自分たちは正義と平和を続けていく」。全国集会の開会式において、社会司牧関係の委員会の組織改編について簡単な説明があった。「正義と平和協議会」という名前は消えるらしい。韓国の司祭がこう言っていた。「最近では正義と平和という名前が敬遠される。なぜならそれがしばしば分断と対立を生むから」。なんと皮肉なことだ。社会の中で苦しむ人が生まれる原因を生んでいるものを明らかにし、是正を求めることは、確かにその相手と対立を招く。しかし、その対立の中で粘り強く行動し、事態を改善してきた歴史もある。無関心でいらなかった人々の行い。正義と平和協議会の歴史の一部ではあるが、それを研究している私としては寂しい。記録を確かに残しておきたい。

次の日の分科会は「広島原爆、そして教皇フランシスコ」を選んだ。原爆は突然空から降ってきたのではない。理由があって広島が選ばれた。アメリカ軍としては、原爆の効果を実験したかったし、広島は日清戦争以来の軍都だった。その説明は長い時間をかけてなされた。聞き続けることは根気のいることである。そこで、いくつか紹介された『兄弟の皆さん』からの一節が私の心に深く入った。「今日では、もう長い年月が流れた、前を向くべきだ、とのことばで、ページをめくってしまいそうになります。お願いですからそれはやめてください。記憶なしには決して前に進めません」。世界から核兵器は無くならないし、戦争も終わらない。「あれは昔のこと、他所のこと」と人類はページを何枚もめくってしまったのではないか。そう思うと、やはり、「ちょっと待ってください」と言う存在が必要だ。ある信徒の言葉にヒントがあるように思った。「福島で原発に反対していた人、甲状腺がんになり今裁判を起こした高校生など、伝えるべき人の言葉をカトリック教会がいわば一つのメディアとして他に伝えるという役割がある」。

最後の派遣ミサでは、これまでの教会による日韓連帯にも触れつつ、教会が福音を生活によって証しするだけでなく、人間の命の尊厳と基本的人権、共通善などに関わる問題を福音と教会の教えに照らして、人々のために発言してきた正義と平和協議会の役割が評価されていた。「名前は無くなってもその役割を捨てない」という司教団からのメッセージと思い、心に留めておきたい。



枯死が確認されるも保存整備を行い、
モニュメントとして残る奇跡の一本松

『ともに暮らす家』を次世代に繋ぐために

— 原子力の入り口と出口を歩いて —

古林 朋子（高野教会）

毎年8月、戦場の恐怖と狂気を描いた映画『野火』が全国でアンコール上映されているのをご存知の方も多いと思います。大岡昇平の同名小説を原作とし、塚本晋也監督が自費を投じて製作した作品です。2025年の上映を前に、塚本監督はあるインタビューで、2014年にこの映画の製作を決意した背景を語っていました。少し長くなりますが引用します。

- 小説『野火』は高校生の時に読んで感動し、いつか映画にしたいと思っていました。長年準備をしていましたが、「意義はあるが、お金がかかりすぎる」と出資を断られ、なかなか進みませんでした。それがだんだん「日本軍がボロボロになってゆく話は不謹慎」と拒絶されるようになってきた。何かが変わってきたと感じていた頃に、2011年に原発事故が起きました。
- 恥ずかしいですが、それまでは原発にあまり関心を持っていなかった。少し勉強して、「核のごみ」は何万年も地下に埋めると知り、驚愕しました。気の遠くなるような時間の中で、地形が変化したらどうなるのか。万が一にも未来の子供たちに危険はないのか。それよりも目先の経済を重視するのか。一人ひとりの命はそれほど大事にしないでいいんだと言われているような気がして、これは戦争とつながっていると感じました。
- 2012年、自民党「憲法改正草案」にも驚いた。憲法は国民が国家権力を縛るもののはずなのに、反対に読める条文がありました。もう待ってられない。『野火』の自主製作を決めました。

「底が抜けた世界」の不安に向き合う、塚本晋也監督『野火』の10年 2025年8月2日 朝日新聞WEB より

この言葉は、今の日本を覆う「命の軽視」への鋭い告発として、私の心に深く刺さりました。

今年、私は監督が言及した「核のごみ」の処理を担う青森県六ヶ所村の核燃料サイクル施設と、原発事故の現場に近い福島県南相馬市を訪れる機会を得ました。監督の思いを胸に、この2地点を巡る旅を振り返りたいと思います。

【六ヶ所村：終わりのない「核燃料サイクル」の迷走】

広大な下北半島の風景の中に、突如として現れる要塞のような巨大施設。それが六ヶ所村の核燃料サイクル施設です。厳重な警備を抜けて入場した「再処理工場」で目にしたのは、全国の原発から運び込まれた大量の使用済み核燃料が、深さ十数メートルの巨大なプールの中に青白く沈んでいる光景でした。

ここで進められている「核燃料サイクル」とは、使用済み燃料を「再処理」してプルトニウムを取り出し、再び燃料（MOX燃料）として利用することを目指す国策です。しかし、1993年の着工以来、工事の延期は繰り返されています。



六ヶ所核燃料サイクルセンター内
建物の前の芝生に「く火の用心」の文字が刻まれる

現在、工場内で再処理を待つ燃料は2986トン^{ウラン}Uに及びます。仮に操業したとしても、取り出されるプルトニウムの使い道は極めて限定的です。日本にはプルトニウムを燃やす高速増殖炉はなく、既存の原発で使う「プルサーマル」も4基に留まっています。需要と供給の整合性が取れないまま、大量の核物質を保有し続ける日本の姿勢に対し、国際社会、とりわけアジア諸国からは核兵器転用への懸念の目が向けられています。そのため、施設内では国際原子力機関（IAEA）の職員が常駐し、カメラによる厳しい監視が続けられているのが現実です。

【一万年の孤独：押し付けられる「負の遺産」】

塚本監督が「驚愕した」と語る通り、再処理の過程で必ず発生する「高レベル放射性廃棄物（核のゴミ）」の問題は、もはや人間の想像力を絶する領域にあります。放射能を帯びた廃液はガラス固化体に加工され、まず50年の間、施設内で冷却保存されます。その後、最終処分場へ運ばれ、地下深くへ埋めて一万年以上管理される計画です。

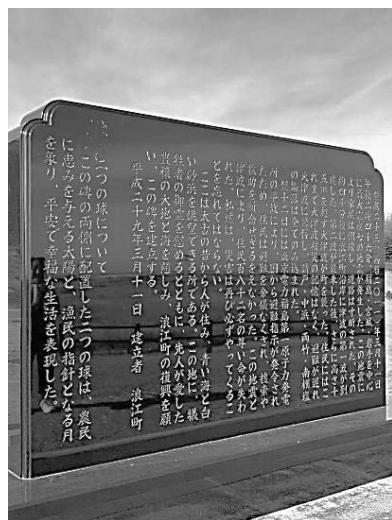
一万年という月日は、人類の文明の歴史を丸ごと飲み込むほどの悠久の時です。製造直後のガラス固化体は、一本で約2万テラベクレルという致死レベルの放射線を放ちます。一万年後でも約2テラベクレルという高い線量を維持しており、近づけば死に至る危険性は変わりません。これほどの年月、誰が責任を持って安全を担保できるのでしょうか。

さらに深刻なのは、冷却期間が終わる2045年までに移設するはずの最終処分場が、いまだにどこにも決まっていないという事実です。「出口」がないまま、危険なゴミだけが増え続けている。私たちは、致死性の物質を一万年以上にわたって維持管理するという途方もない重荷を、顔も知らない未来の子どもたちに、断りもなく押し付けようとしているのです。

【南相馬：「不都合な真実」を覆い隠す空気】

一方、福島県南相馬市では、震災から14年が経過した今も、目に見える風景と見えない痛みが交錯していました。美しく整備された街並みのすぐ隣に、未だ警戒区域のバリケードや更地が残されています。モニタリングポストが今も刻み続ける線量は、日常の中に潜む異常を静かに伝えています。

除染で出た土は「復興再生土」と呼び変えられていますが、その有効な使い道は見出されていません。塚本監督が『野火』の製作時に「ボロボロになる話は不謹慎」と言われたように、今の社会もまた、解決困難な廃棄物の問題や、故郷に戻れない人々の苦しみといった「不都合な真実」を、「いつまでも暗い話をするな」



浪江町の慰霊碑。海を望める場所にある。「私たちは、災害は再び必ずやってくることを忘れてはならない」と刻まれている。向この面には犠牲となられた185名の方のお名前がある。

と、「不謹慎」のレッテルを貼って遠ざけようとしているように思えてなりません。

2023年、政府はGX（グリーントランスフォーメーション）推進の名の下に、原発の運転期間を事実上撤廃する法整備をし、老朽原発の再稼働へと大きく舵を切りました。この流れを受けて、2025年11月には東京電力は柏崎刈羽原発の再稼働を決めました。グリーンという聞こえの良い言葉が、かつての痛み、悲しみをただ塗りつぶそうとしています。

【「ともに暮らす家」の住人として、沈黙を破るために】

カトリック教会は、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』を通じて、神から委ねられた「共通の家」である地球を守る未来への責任を説いています。しかし、原子力という技術は、事故があってもなくても後始末に莫大な時間と負担を要する、これは、『ラウダート・シ』で示された未来への責任を放棄した技術ではないのかと、私には思えます。

ドイツの神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーは「悪に直面して沈黙することは、それ自体が悪である」と語りました。塚本監督が「もう待ってられない」と自主製作を決意したように、私もまた、この「命を軽んじる空気」に対して、沈黙を破らねばと思うのです。でも、何を言えば、何を叫べばよいのかわからない。ただおろおろと自問自答を重ねるばかり、無力感に苛まれる人間に過ぎません。

ただ、今年、2つの地を訪れ、その現実に触れたことで、少なくとも「知らなかったこと」にはできなくなりました。

せめて今、自分はまず立ち止まりたいと思います。効率や経済という言葉で自分の心が上書きされてしまわないように。

すべての被造物に与えられた「ともに暮らす家」が、一万年後も、そのあともずっと神の愛に満ちた場所であるために。私たちがいま手にしている利便性が、誰かの犠牲の上に成り立っていることを忘れず、祈りの中で真に命を尊ぶ解決の道が示されることを願って歩んでいきたいと思います。

正義と平和協議会 2026 年度の予定

学習会 立ち止まって考える～誰とともに歩む教会になりたいのか～

日 時：2026 年 4 月 18 日（土）

場 所：河原町カトリック会館地下 2F ホール

講 師：ビスカルド篤子さん

戦争と平和写真展 沖縄・フクシマ・ヒロシマ

日 時：2026 年 8 月 8 日（土）～9 日（日）

場 所：カトリック河原町教会ヴィリオンホール

現地学習会 農業について考える

日 時：2026 年 11 月 場 所：検討中